

2023 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	小児看護学実習カンファレンスでの看護教員の教育的関わりに至る判断
キーワード	①小児看護学実習、②実習カンファレンス、③判断

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	シミズ フミエ 清水 史恵
配付時の所属先・職位等 (令和5年4月1日現在)	京都看護大学 看護学部・講師
現在の所属先・職位等	滋慶医療科学大学大学院 医療管理学研究科・教授
プロフィール	2003年兵庫県立看護大学大学院看護学研究科修士課程修了、2015年京都大学大学院医学研究科博士課程修了。大学卒業後、看護師として、病院、地域の小中学校、特別支援学校等で小児看護の経験を積む。2017年より小児看護専門看護師。教員として、大学や専門学校で、看護師、保育士、介護福祉士を養成する基礎教育に従事。2022年より京都看護大学（講師）、2024年4月より現職。

1. 研究の概要

小児看護学実習における実習カンファレンスでの学生の学びが深まるよう、教育的な関わりを実施する上で、看護教員がどのように判断しているのかを明らかにすることを目的とした。大学に勤務し小児看護学実習指導経験を5年以上有する看護教員18名を対象として、一対一のインタビューを実施し、その内容を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて分析した。

結果、5《カテゴリー》、10〈サブカテゴリー〉、44【概念】が見いだされた。

看護教員は、教育的関わりとして、《カンファレンスでの学びを深めるための準備》と《学生の学びの実感につなぐ支援》を実施する上で、《学生の理解》をして《自分なりのやり方からの選択に向けた思案》を行っていることが明らかとなった。また、その選択に向けた思案には《学生の学びへの思い》が影響していることも明らかとなった。これらの結果は、看護教員自身の学生の理解や学生への教育観、これまでの看護教員経験の中で編み出した自分なりのやり方が、看護教員が教育的関わりを実施する上での判断において重要であることを示唆していた。

2. 研究の動機、目的

少子化が進む中、小児病棟は減少している。一方で、看護系の大学は増え、小児看護学実習の場を確保することが難しい状況が生じている。そのため、病棟での実習期間を短縮し、病棟と保育所や幼稚園、小学校、特別支援学校、外来など、多施設にわたって小児看護学実習を行う大学が増えている。実習期間が短縮した小児病棟や多施設にわたる実習において、実習目的や目標を達成できるよう、一日一日の学生の学びを深めるため、看護教員による教育的関わりの重要性が増している。

本研究では、小児看護学実習における実習カンファレンスでの学生の学びが深まるよう、教育的な関わりを実施する上で、看護教員がどのように判断しているのかを明らかにする。

本研究の知見を看護教員自身が意識して活用することで、看護教員のカンファレンスを進める自信、困難感の軽減、教師効力を高めることにつながることを期待される。

3. 研究の結果

大学に勤務し小児看護学実習指導経験を5年以上有する看護教員18名を対象として、一対一のインタビューを実施し、その内容を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析した。

その結果、5《カテゴリー》、10〈サブカテゴリー〉、44【概念】が見いだされた。

看護教員は、実習カンファレンスが学生にとって学びの深いものとなるために、《学生の学びの実感につなぐ支援》だけではなく、《カンファレンスでの学びを深めるための準備》が重要と考え、取り組んでいた。看護教員は、《カンファレンスでの学びを深めるための準備》として、〈カンファレンス運営の学生の準備性の促進〉、〈実習での経験を語れる土台作り〉、〈実習施設の看護師との理解の共有〉を行っていた。また、《学生の学びの実感につなぐ支援》として、〈カンファレンスでの安心感の醸成〉、〈カンファレンスで語りあえる流れ作り〉、〈学生の思考を拡充する支援〉、〈学生の経験の語りを学びにつなげる支援〉をしていた。

それらの準備や支援を行うにあたり、看護教員は、《学生の理解》に努めていた。看護教員は、《学生の理解》をすることで、【学生がカンファレンスで発言がない原因を考える】、【カンファレンスの流れを予測する】ことをしていた。また、教員は、その時の【カンファレンスでの学生の到達目標を設定する】ことをしていた。そして、【これまでの教育経験をもとに関わりを考える】、【タイミングをみはかる】ことをし、これまでの教員経験の中で作り上げてきた《自分なりのやり方からの選択に向けた思案》をしていた。

看護教員が、《自分なりのやり方からの選択に向けた思案》をする際には、〈学生の学びへの看護師の影響力の希求〉、〈学生の学びへの希望〉、〈次につなげる意識〉という《学生の学びへの思い》が影響していた。

4. 研究者としてのこれからの展望

研究者として、長年取り組んでいる“学校で学ぶ医療的ケア児への看護”に関する研究を継続していきたいと考えています。また、社会にとって必要な研究は何かを常に考えて、その他の分野の研究にも取り組んでいきたいと思っています。私一人が行える研究には限りがあるため、臨床現場で研究の種を見つけ、研究倫理を遵守して研究に取り組める研究者を育成することにも取り組んでいきたいと考えています。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

このたびは、研究をご支援いただき、誠にありがとうございました。女性研究者奨励金をいただくことで、経済面の心配をすることなく研究に取り組むことができました。何より、女性研究者奨励金をいただくに値する研究として評価いただけたことは、とてもありがたいことでした。今回取り組んだ研究の成果が、小児看護学実習を担当する教員にとって役立つものとなるよう、研究をさらに洗練していきたいと思っています。研究者、教育者として、少しでも社会に役立つことができるように取り組んでいきます。